☆学校経営の底に・・・☆

命を大切にし、子どもたちの笑顔があふれる学校・明日も行きたくなる学校

- 「奇跡の命と奇跡の命が、奇跡的に出会っている！」
- 「教育は、かけがえのない命を輝かせる営みである！」

＜学校教育目標＞

『未来に向かって　命かがやく　笑顔あふれる　うしおっ子の育成』に込めた思い

未来に向かって

「未来」という言葉は、「夢や希望」というプラスだけの意味ではない。

国は10年、15年先の世界は予測できるが、AIをはじめとして科学技術が目覚ましく進歩していく30年、40年先は「予測困難な時代」になると言っている。

いつの時代でも、世の中を中心になって動かすのは40代から60代。そう考えると、まさしく予測困難な時代の中心になるのは、今目の前にいる子どもたち。そんな時代を生きる子どもたちにどんな力をつけてやらなくてはならないのか。

国連の人口部によると、現在の世界の人口は約79億人だが、約30年後の2050年には98億人になると予測している。一方日本の場合、現在は1億2000万人の人口が2050年には9700万人程に減るという。そうなると、日本が今の国力を維持していくためには、必ずこれまで以上に外国人の労働力が必要なってくる。と同時に、一層グローバル化した世界に生きる子どもたちの中には、外国で生活する者も出てくる。言葉、習慣、環境、常識、宗教などが異なる国で育ってきた外国の人たちと、共に生きていったり、力を合わせて仕事で成果を出したりするためには、まず相手の言うことを、相手の育ってきた背景を意識しながらしっかり「聴く」ことが必要。そして、相手がわかるように（わかるまで）ていねいに「話す」ことが必要。でも、もっと大切なのは、相手と自分のどちらかの意見を押し付け合うのではなく、お互いの意見のいいところを組み合わせて、新しい考えを生み生み出していくこと、つまり**合意形成の力**が必要になる。

「未来に向かって」の言葉の中には、このような思いを込めています。

命かがやく

「命」を大切にした教育はどのようにあるべきか。安心・安全な生活をさせたいのは当然だが、すべての危険から遠ざけることなんてできない。逆に、生きていく中で、時には危険と思われることと向き合いながらも、どう工夫すればそれを乗り越えて力をつけていけるのか挑戦させることも必要。例えはよくないかもしれないが、例えば刃物（包丁）。子どもに「危ないから触ってはいけません」とすれば、子どもが包丁で手を切ってケガをすることはない。安心。しかし、使うための環境を整え、使い方（包丁の持ち方や食材を抑える手の指を猫の手にするなど）を教えたり、やって見せたりしながら、傍にいて何かあったらすぐに対応できる状況や環境の中で使わせることで、包丁の使い方を覚え、料理ができるようになり、創作する世界が広がってくる。時には、ある程度のリスクを負ってでも**経験させること**が大切だということ。

人は、直線や曲線では成長しない。階段状に成長する。何もしなければ時間は経つ（歳は取る）だけで、人間的な成長はない。歳は取っているけど、人間的に？と感じる人。まだまだ若いのに、この人すごい…と感じる人。間違いなく経験量の違い。心が揺さぶられるいろんな経験（うれしいこと、感動したこと、やり切った喜び、成功体験…、また、辛かったこと、悔しかったこと、悲しかったこと、一体どうしたらいいのか路頭に迷うような焦燥感や孤独感…）を体験したり乗り越えたりすることで、「経験」という引き出しがどんどん増えて、それが自信となる。たくさんの自信を持てることで人間力が高まり成長する。結果として「命」が輝いていく。

「命かがやく」の言葉には、このような思いを込めています。

笑顔あふれる

笑顔、笑いには不思議な力がある。周りにいる人の心を時にはやわらげ、時には温かくし、時には安心させ、時には元気にさせる。また、自分が少々辛いときに、無理してでも笑顔で過ごすことで、自分の心も明るく前向きになる。頬の筋肉を笑顔で緩めると、不安が少しずつ解消されて、気持ちも明るくなっていき、場合によっては免疫力さえアップすることも科学的に証明されている。自分も、自分の周りの人も笑顔で過ごすことで、集団としてのレベルもアップしてほしい。

「笑顔あふれる」という言葉には、このような思いを込めています。